

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

種村俊介

論 文 題 目

英語学習者の多読行動を規定する構成要素の内部構造の記述と  
多読行動モデル構築の試み

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 山下 淳子

委員 名古屋大学 教授 木下 徹

委員 名古屋大学 教授 藤村 逸子

# 論文審査の結果の要旨

## 1 本論文の概要と構成

この論文は、日本語を母語とする英語学習者の多読行動に影響を与える情意要因を検討するため、計画的行動理論を基に母語の研究で見出された読書に影響を与える5つの要因（認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図）について、それぞれが、英語の多読図書を読むことに対してどのような内部構造（因子構造）を有するのかを検証し、さらにこれら5つの要因を独立変数とした多読行動モデルを構築することを目的としている。工業高等専門学校1年生を対象に20週に渡って英語の授業内外で行われた多読の参加者に質問紙調査を行い、それに基づいた詳細な分析がなされた。5つの情意要因はすべてが複数の下位要素からなる多面的内部構造を持つことが実証され、それらを使い多読行動を予測するモデルを複数検討した結果、データに対する説明力が相対的に最も高いモデルを得ることができた。また多読を経験することで5つの情意要因の内部構造の一部に変化が現れることも明らかになった。さらに、英語力の上位群下位群に分けて同様の検証を試みたところ、下位群では多読により不安感が減り、他者とのかわりの中で多読をする意図が高まる傾向があることが見出された。本論文は7章からなり、参考文献の他に、使用した質問紙や英語のテスト、学習者の書いた読書記録手帳、分析に関連する様々な統計量など12種類の資料が添付されている。

第1章では本研究のテーマである学習活動の多読を定義し、それを実践するための様々な方法論や教育的意義を論じたのち、第二言語の多読研究における本研究の位置づけ、目的、論文の構成を述べている。

第2章では、本研究の理論的基盤となる計画的行動理論について、その前身となった合理的行動理論から歴史的発展過程を含めて詳述し、「態度」という概念の定義と、態度と行動の関連について論じている。それによると、計画的行動理論は、現在の社会心理学の中で広く受け入れられ、人間の行動を予測、説明するための基盤となっている有力な理論であり、行動に対する意図と行動統制感が実際の行動遂行に直接的に影響を及ぼすと予測する。また、意図と行動統制感に影響を与えるいくつかの要因も想定されており、それら複数の要因が様々な影響を与えながら、人間の行動を決定するとされる。第3章では、まず同様の理論的基盤に立つ母語話者対象の先行研究をレビューし、そこから得られる知見として、計画的行動理論が仮定する要因の多くが多面的であるということ、この理論に基づき母語での読書行動のモデルが構築できること、読書行動に影響を与えるのは、態度（感情面、認知面）・行動統制感・主観的規範であること、読解力が態度に影響を与える可能性があること、および、読解力が態度に影響を与える可能性があること等を挙げている。次に、第二言語と

しての英語の読書と情意要因に関する先行研究をレビューし、そこから得られる知見として、態度（感情的、認知的）は多面的であるが、「多読図書を読むことに対する態度」に特徴的な因子が存在するかについては結論がでていないこと、その他の計画的行動理論の構成要素の多面性については実証されていないこと、態度などの情意要因が英語の多読行動と関連するかについては一致した結果がで

## 論文審査の結果の要旨

ていないこと、英語力が多読行動に影響を与える影響についても一致した結果がでていないこと、英語力が情意要因形成に与える影響についてはごくわずかな研究しかないこと、多読による情意要因の変化についても一致した結果が出ていないこと等を挙げている。そして最後に、これらの知見から残された課題を整理し、本研究が扱う7つの研究課題を提示している。

第4章は本研究の方法論を扱い、研究の参加者、調査のための質問紙、英語力測定のためのテスト、多読を取り入れた授業方法、データ分析方法などが論じられている。本研究の参加者は国立工業高等専門学校1年生209名(分析は206名)で、2012年度4月から2013年2月の2学期20週にわたって、90分の英語の授業のうちの15分と授業外の時間を使って多読を実施した。夏休み中も1冊以上多読用図書を読むことが課された。多読用図書としては、英語を母語とする児童向けの図書や英語学習者のレベル分けのあるリーダーなど約1000冊を使用した。さらにやる気のある参加者は研究室にある3000冊、および図書館にある900冊の多読用図書から好きなものを借りて読むことも可能であった。参加者は図書を1冊読み終えるごとに読書記録手帳を提出することが義務付けられた。研究課題に答えるため2回実施された質問紙の項目はいくつかの予備調査を通して作成され、英語力を測るテストは英語運用能力評価協会が開発したBasic Assessment of Communicative English (BASE)というテストの語彙・文法とリーディングのスコアを用いた。テストは、多読を授業内で10週間行った9月に実施され、質問紙は9月とさらに多読を10週間行った翌年2月に実施された。

第5章では、多読を10週間実施した時点でのデータに基づく分析結果とその考察を通じて、6つの研究課題に対する答を探求している。まず、探索的因子分析、検証的因子分析を通して、認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図のすべての概念が多面的内部構造(因子)を持つことを実証した。次にこれらの因子のどれが多読行動(読語数と読書時間)と相関を持つかを分析した後、構造方程式モデリングの手法を使って、多読行動を予測するモデルを求めた。潜在変数と観測変数を併用したモデルではデータに対する適切な適合度が得られなかったため、変数を再編して観測変数のみで複数のモデルを検討した。その結果、十分な適合度を持つモデルを得ることができた。多読行動を示す指標には読語数よりも、読書時間を用いるほうが適合度が高い結果となった。また英語力は読語数・読書時間両方に影響を与え、英語力の高い学習者の方が多く読むという結果であった。英語力の上位群、下位群ごとに多読行動のモデルを検証した結果、2つの相関係数に群間で有意な差が検出され、上位群のほうが、行動統制感と態度、行動統制感と主観的規範の相関が下位群より高かった。最後に、英語力が本研究で取り上げた5つの情意要因(認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図)の形成に寄与するかどうかという課題については、寄与するが必ずしも大きくはない、という結論であった。

第6章は、多読をさらに10週間経験した後のデータを分析し、多読経験によって5つの情意要因がどのように変化するかという最後の研究課題を探求している。それによると、以前は1つであった認知的態度の因子が2つに分かれたり、認知的態度と行動統制感それぞれの1つの因子が、異なる因

## 論文審査の結果の要旨

子に変容したりした。また英語力下位群においてのみ、感情的態度の「不安」因子と、意図の「関わり」因子が変容し、多読を継続することにより、英語の読書に対する不安が軽減されること、教師や学生同士の関わりの中で多読を行おうとする意図が高まること、を示唆する結果と解釈された。

最終章となる第7章では、この研究で得られた結果をまとめ、教育的示唆を論じたのち、研究の限界と今後の展望について議論している。それによると、学習者の多読を促進するためには良好な「認知的・感情的態度」を育成することが重要で、教師は、適切なレベルの興味深い多読図書を提供し、折に触れ多読の効果を伝え、学習者が多読の楽しさ、それによる英語力の向上を実感できる場を提供するよう努めるべきで、そうすることによって、英語力が低い学習者でも多読に対する意欲を高められる可能性があるとしている。また独立して多読を行うだけでなく、他者との関わりの中で多読を行う状況を作ることも有効と思われる。さらに、教師は母語での読書傾向についても把握することが大切であるとしている。最後に本研究の限界や今後の課題としては、対象が工業高等専門学校生徒というある種特殊な環境にあったことから、異なる環境の英語学習者を対象として調査を拡大し、インタビューなど質的調査方法も取り入れながら、より一般化のできるモデル構築に今後望みたいとしている。

### 2 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- (1) 関連する先行研究を、母語の研究、第二言語の研究とともに幅広くカバーし、それぞれの研究の貢献と限界の両方に言及するバランスのとれたレビューを展開している。
- (2) 第二言語の読みに関する読書態度の研究は限られており、その意味で、200名を超える学習者のデータを丹念に分析した本研究は、貴重な実証的データを当該分野に提供している。
- (3) 夏休みをはさんだ20週にわたって、研究上の統制を取りながら、教育現場で毎週データを集め縦断的研究をした価値は評価される。
- (4) 多読図書に対する読書態度に焦点を絞っているため、対象が狭くなるという一面がある反面、このように研究対象を特定化することにより、これまで出版された第二言語のリーディング研究には見られない新しい側面を扱うことにもなっている。
- (5) 集められたデータに対する統計分析の手順が詳細に記述されている。これは論文としては、時として単調な記述の繰返しのような印象を与えるかもしれないが、逆に言えば、著者が丁寧に統計分析の前提を確認しながら作業を進めたことの軌跡であり、博士論文執筆過程を通して、将来の研究に必要な技能を磨いてきたことを示すものである。
- (6) 英語で多読をする学習者の情意面について、教育現場に還元され得るいくつかの興味深い提

# 論文審査の結果の要旨

案をしている。

一方で、以下のような将来に向けての改善点も指摘された。

- (1) 教室内における、なかば強制された多読行動と、教室外での自主的な側面の強い多読行動が混在しており、そのことが行動統制感をはじめとする要因やモデル全体に影響を与えている可能性も否定できない。将来的にはこの点も踏まえて研究を継続して欲しい。
- (2) 適合度指数の1つが基準を満たさなかったため、採択を見送ったモデルがあるが、そのモデルは従属変数を複数の要素で多角的に構成しているため、概念的により妥当で汎用性にすぐれたモデルともみなせる。数値だけで議論するのではなく、概念的なものも含めてより慎重に検討し、将来の研究ではこのモデルも捨てず、新しいデータで検証を試みることを勧めたい。

しかし、これらの指摘は、今後研究をいっそう発展させるための課題であり、本論文は博士論文として十分に評価できるものである。

## 3 結論

以上の評価により、審査委員会は本論文が博士（学術）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。